

他者との不可避の邂逅：その場面と姿形

再帰的近代における「自己のテクノロジー」の外部

千葉商科大学 権永詞

1. 目的・方法

本報告では、再帰的近代と呼ばれる現代において、私たちがその自明性に深く身を沈めているがゆえに見えにくくなっている他者の存在を、その関係が不可避に現れる場面に視点を当てることで描出することを目的とする。

自己が自分自身に深く強い関心を向け、自己を対象として働きかけることで自らの所与を改変していくことは、私たちの多様な生を切り開く基本的な態度となりつつある (Beck and Beck=Gernsheim 2002)。だが、こうした態度は一方では非情なまでの自己責任の論理がもたらす自己疎外を、他方ではそれを避けるために拙速に求められる共同性への欲求の副作用としての他者の排斥を生みだしている。現代においては、自己が自己に関係するための「自己のテクノロジー (Foucault 2004)」の進化・深化が、他者への配慮や、他者という／あるための技法の貧困化を招きつつあるとよい。

そこで、本報告では「自己のテクノロジー」が形づくる日常のなかの他者の存在を、個人化論、統治性論、モノの社会学といった現代社会理論の整理・検討を通じて再考する。考察の主眼は、「自己のテクノロジー」を駆使するなかでの他者との不可避の邂逅を、その出会いの場面とそこに現れる他者の姿形において明確化することにある。

2. 結果・結論

自己が他者と不可避に (選択的にではなく) 関わってしまう場面は、人間の生の脆弱性、有標性、埋没性といった性質から生じる。私たちの生命・生活が本質的に脆弱なものであり、その維持に他者の手を求めざるをえないことは、依存を引き受ける (引き受けざるをえない) 他者を要請し、自らを他と区別するための標を持たざるをえないことが自己のアイデンティティに承認を与える／拒む他者を要請する。また、いかに脱埋め込み化が進もうとヒトが場所と時間の拘束から完全に自由ではいられないことは、自己を特定の文脈に引き止める桎梏となる経験や記憶のメディアとしての他者を出現させる。

これらの他者は、それぞれの場面で3つの相貌を持って現れる。第一に、固有の名前と生活歴を持つ他人として、第二に、歴史と社会状況が特定する標を共有する集団として、第三に、自己への／からの関わりの結節点として現れるヒトではないモノや出来事として。とりわけ、個人化論のなかでも十分に議論がなされてこなかったモノや出来事としての他者との関係への着目は今後重要になるだろう。

リスク管理の技術を駆使する「自己のテクノロジー」は、こうした他者を射程に捉えきれておらず、また射程に入れていないからこそ個々の〈生〉を数として扱う生-権力の統治技法と結びつきうる。「自己のテクノロジー」そのものを棄却することなく、不可避に出会わざるをえない他者との関わりをいかに「自己のテクノロジー」の拡張に組み込むのか。本報告は、この目標が次に要請する自他関係の経験的記述のための視点・概念の整理と位置づけられる。